

狐の話（八話） = = = 三州横山話より

狐の穴

私の子供の頃には、人家に近い木立の中などに幾カ所も狐の穴があって、それが一ヶ所に六つもかたまってあったもので、冬になると、芋穴の芋を掘り出したり、毎晩のように鶏を襲ったりしたものです。雪の降った朝には、かならず狐の肢跡が家の囲りに続いていました。その狐の穴が、いつとなしに埋まってしまって、この二〇年来、めっきり狐がいなくなったと言います。

狐は仇をする獣だと言って、狐に悪戯をしたり、陰口などつくと、アタン(仇)をされると言って怖ろしがったものでした。また狐の糞を踏むと、足が痛くなると言って、子供の時など足が痛いなどと言えば、どんなところを歩いたとか、狐の糞を踏んだのではないかなどと訊かれたものでした。

屋根へ登る狐

夜、狐が人家の棟に登ると、眠っているものがうなされると言って、夜梯子を屋根に立て掛けておくことを戒めました。また狐が鶏を捕るときは、外にいて戸の隙や節穴から鶏の巣を覗いて、法を使うので、鶏が巣から飛び出して捕られるのだとも言いました。またあるところで、子供が夜泣きをして仕方がないので、ある晩男がそっと裏口へ廻って見ていると、狐が裏の縁側へ登るとはげしく子供が泣いて、下に降りると静まるので、この狐を追い払うと、夜泣きがやんだなどの嘯がありました。

蠟燭を奪る狐

狐は火を灯すと言います。狐の火は青い色をしているとも、また特に赤い色をしていて、輝きがないとも言いますが、狐は油や蠟燭を好むから、夜油を持って歩くと、不思議に奪られたりこぼしたりすると言います。また提灯を灯して歩く時、前に提げると蠟燭を奪られるから、後に背負えばいいなどと言います。村の早川虎造と言う男は、若い頃、悪い狐の住んでいると言う馬崩れという処を通る時、いつか持っていた提灯をカゾー(楮)の株とすり替えられながら、家まで持って来ました、そして家の者に言われるまでは、それが明るいと思っていたと言いました。

人を化かす法

狐が人を化かすには、尻尾で化かすと言いますが、人間の方が用心深くて化かす機会のないときは、足許へ近づいて、足袋の紐を解いて、人間が足袋の紐を結んでいる隙に化かすと言います。

明治三〇年頃、村の早川徳平という家に下男をしていた留吉という男が出遇わせたことだそうですが、それは盆の十五日の夜、友達と三人づれで豊川稲荷へ参詣に出かけて、真夜中頃、途中の本野が原というところまで来ると、傍の畑の中に若い女と、男が二人、風呂敷包みを背負って、三人とも尻を端折って妙な恰好をして歩いているので、不審に思っ、そこに立ち止って、煙草を喫いながら見ていると、近くの畑の肥溜の屋根に白い狐がいて、しきりに尾を振っていた。初めて狐に化かされているのだなと感づいたので、三人して大きな声で怒鳴ると、狐はそこに人がいることを知らずにいたのか、丸くなって逃げて行ったそうで、化かされていた連中も正気に還ったということでした。だんだんわけを聞くと、この人たちは近くの一鍬田村のもので、若い女が嫁に行くので、父親と下男とが仕度の着物を豊川の町へ買いに行った帰り、その畑の中が一面の川に見えて、どうしてもそこが渡り切れなかったので、そこで尻端折りをしたのだそうです。そのとき、若い女の尻を端折った股のところに大きな痣らしいものがあって、月の光で明瞭に見えたと言いました。

仇をされたのだからという話

早川丑太郎という男は現在五十幾歳になって、長篠駅に出て俥夫をしています、この男が一三、四のおり、隣村へ使いに行つて還りに、途中までは、確かに帰つて来たと思つたのが、どうまちがえたのか道が判らなくなつて、山から山と一晩迷つて歩いて、翌朝、遠くの山へ朝日が映つたのを見て初めて正氣づいて家へ帰つたと言いましたが、よくよく考へて見ると、前日、裏の山に新しく出来た狐の穴に獵師を案内して見せたために、その穴の狐が仇をしたのだからということでした。同じ男が、二〇歳ぐらゐのとき、近くの峯村へ仕事に行つて、夕方仕事すすんでから、その家の狐が憑いているという婆さんの枕辺に行つて、子供の頃狐に化かされた腹癒せに、さんざん狐の悪口を言つて、俺を化かせるものなら化かしてみろ、と言ひ置いて、夜遅くなつて暇を告げて帰つて来ると、途中文垂というところの橋を渡る時、半ば渡つてふと氣がついて見ると、自分の立っているところは黒く川に見えて、橋は白く傍に架かっているように見えるので、これはと思つてそつちへ足を運ぶと、忽ち川の中へ落ちたと言ひます。起き上がろうとすると、何ものかが上から押さへつけているようで、身動きが出来ないので、一生懸命怒鳴りながら懐中のマッチを探つてい

ると、やっと体が軽くなったので、はやばや川から這い出して、ずぶ濡れになって帰って来たと言いました。

化かされて絹糸を焼いた噺

これは母から聞いた噺でしたが、某という男が、一一月のこと、新城の町へ用足しに出かけて、帰りに紺屋へ寄って、正月の仕着せに織る絹の染糸を受け取って、風呂敷に包んで背負って、日の暮れ暮れに、須長という村へさしかかった辺りで、子供を背負った年増女と道連れになったので、種々秋の収穫の話などしながら歩いている中に、きれいな芝草の続いた原へ出たので、こんなところはなかったはずだと不思議に思っていると、大層きれいな草原ですから草履を脱いで歩きましょうと言って自分から脱いだので、男も同じように脱いで歩いていると、大分寒くなったようですから、そこらで焚火をしましょうと、女が言いながら、どこからともなく、一抱えの杉の枯葉を持って来たので、その男が袂からマッチを出して火をつけて、ともに温まっているうちに、とろとろ眠気を催して、そのまま眠ってしまったところが、しばらくしてから体中がぞくぞく感じて眼を覚ますと、もう夜が明けて朝日がちらちらと射しているのに、気がついて見ると、女の姿はなくて、自分は真っ白に霜の降りた田圃の中に寝ているのであった。傍には紺屋から持ってきた絹糸が黒く灰になって、もえ残りが五寸ばかり、束になっていたということでした。杉の枯葉と思って燃やしたのは現在自分が背負っていた絹糸だったのかと、口惜しがって、燃え残りの糸を持って、他人に見られないうちにと急いで帰って来たそうですが、きれいな芝草の原と思って歩いたのが、石ころの道でもあったのか、足の裏が赤く腫れ上がって、痛くて歩かれなかったと言います。この男の名は記憶していませんが、今から三〇年ばかり前のことだそうです。

この噺を狐に化かされたとするには、少し疑問があった。果して狐に化かされたものかどうか、狐の方で化かしたとも何とも言っているわけではなく、また化かした狐を見たのでもなく、狐に悪戯をされる覚えもないので、人の方で勝手に化かされたと信じていて、疑えば何かわけがわからなくなりますが、本人も狐に化かされたのだと信じ、また村で噺をして狐に化かされたのだと言っても疑問を抱く者もないほどですから、仮に狐の部へ入れておきました。次の噺も同じことです。

気楼を見せた狐

これも狐に化かされたのだと一般に信じていることで、狐だという確証のない噺です。

十四、五年前のこと、村の集会帰りのものが、夜更けてから、掘割というところを通りかかると、橋の傍の険しい崖の上で、しきりに心経を唱える声がするのを聞き咎めて、尋ねて行ってみると、早川モトという七〇余歳の老婆が、狐に化かされて、そこへ迷い込んだと言っていたそうです。その老婆にそのおりの模様をたずねたところ、何でも日の暮れ方、隣地から帰って来て、あの辺が自分の家だと思うところまで来ると、路は皆目判らなくなって、山の裾にきれいな二階家がずっと列んでいて、その家に悉く灯がついて、中では笛や太鼓で賑やかに何事が唄っている声が手にとるように聞こえるので、必定狐の悪戯と思って、その場に座り込んで心経を唱え始めたのだということでした。

クダ狐

狐に管狐という一種があって、単にクダともクダン狐とも言います。鼬によく似て、鼬より体が小さく、毛の色が心持ち黒味を帯びていると言います。

狐使いの家などで使うのはこの類で、種々な通力を持っていると言いますが、これに、白飯に人糞をかけて食べさせると、通力を失って馬鹿になると言います。